

# 山西省 山西 / ShanXi / シャンシー

略称：晋 / Jin

州省都所在地：

太原市（太原市 / TaiYuan）

総面積：15万 km<sup>2</sup>

人口：3297万人



## 位置と地勢

省都は太原市。東は長大な太行山脈、西は南流する黄河の峡谷に挟まれた地域で、北は万里の長城が内蒙古自治区との境になっている。黄土高原の東部に位置し、山地と高原がほとんどを占めており、主要都市のほとんどは全省を北から南へ貫く汾河により形成された河谷低地と、大同・太原・長治・運城などの盆地に位置している。東部に位置する仏教名山・五台山は華北地域の最高峰で山頂部・北台頂の標高は 3058m。

## 行政区画

全省の面積は 15 万平方キロ(北海道の約 2 倍)で、行政区画は 10 の地級市・1 つの地区の下に 12 の県級市・85 の県が設置されている。人口は 3297 万人で漢民族を中心に回族・満州族・モンゴル族などが居住している。

## 歴史

山西省は春秋時代には中原の雄国・晋国に属し、続く戦国時代には晋から分裂した趙国・魏国に属した。漢代には並州、元代には中書省山西道が置かれ、明清の時代になり現在の名称が用いられるようになった。明清の時代には商業が発達し、「晋商」と呼ばれた山西省の商人は、安徽省の「徽商」と並び全国を二分する勢力を誇った。

## 産業

農業は北部は粟や菽麦(カラスムギの一種)、ゴマなどの乾燥に適した作物が中心で、南部は中国でも麦と綿花の一大産地となっている。西北部では放牧も盛んだ。特産としては平遥の牛肉、沁州の粟、稷山と運城の棗、清徐の葡萄・原平梨・陳酢、長治の党参、杏花村の汾酒と竹葉青酒などが有名。

山西は古くから「煤鉄の郷」と呼ばれ、石炭資源が極めて豊富な地だ。埋蔵量は全国の 1/5 以上を占め、全省の 2/3 の市県に炭田がある。今日では大同・寧武・西山・沁水・霍西・河東の六大炭田で全国産出量の 1/4 を占めている。工業は重化学工業が中心で、太原の鋼合金・大型機械・石炭化学、運城の塩化化学、中条山の製銅、河津のアルミなどが有名。また食品加工や軽紡績なども急速に発展している。

## 主要都市と名所旧跡

省内の主要都市は省都の太原をはじめ、石炭の街・大同、東部の中心都市・陽泉、南部の中心都市・長治と臨汾などがある。名称旧跡としては太原の晋祠、大同の雲岡石窟、仏教名山・五台山、五岳の一つ北岳・恒山、黄河壺口瀑布、平遥古城などが有名。

## 太 原 市

太原市は黄土高原の東部、太原盆地の北端に位置し、北・西・東の三方を山に囲まれている。

山西最大の河川である汾河が北から南へ約 100km にわたり市域を貫く。汾河は静楽地区で市域に入り西から東へ流れ、上蘭村で南へ折れ、太原市街地を南北に流れている。市域の中部と南部は汾河が形成した北高南低で簸箕の形をした河谷平原が広がる。汾河の支流には瀟河、屯蘭河、大川河、柳林河、凌井河、楊興河などがある。

海拔は最高で 2,670m、最低点は 760m、平均海拔は 800m ほど。市域は山と丘陵地が中心で、平地と川は面積のうち 5 分の 1 を占めている。盆地内の地形は平坦で土壌も肥沃であり、古くから農業が発達してきた。

現在の耕地面積は 210 万畝で、山林面積は 83 万畝、草地面積は 187 万畝。主な農作物はコムギ、イネ、トウモロコシ、コーリャン、豆、イモなど。また野菜、綿花、甜菜、薬草、アブラナなどの商品作物も産する。

山麓では泉が湧き水は比較的豊富。市域内には大きな池沼が六つあり、晋陽湖が最大の湖になっている。汾河の両岸には工業用水や農業用水を運ぶ用水路が広がる。

### 歴史

#### 晋陽と春秋戦国

太原は山西高原を南北に貫き黄河に流れる汾河の中流にある。

汾河流域にも黄河文明の遺跡が多く古くから文明が栄えた。

また洛陽周辺と北京周辺を結ぶ重要な街道が汾河沿いの盆地を通るため、太原は交通の要衝でもあった。

北方の遊牧民族にとって太原は中原を攻めるための拠点で、漢民族にとって太原は北方の守りの要衝であった。

太原は古くは晋陽と呼ばれ、春秋時代の大国晋の都であった。

晋の有力家系・趙氏の当主趙簡子が紀元前 497 年に晋陽の町を築いたことが太原の歴史の始まりとされる。

紀元前 455 年（周貞定王十四年）、有力家系のひとつ智氏の智伯瑤は趙氏を攻め、汾河の水で趙襄子のいる晋陽城に水攻めを行ったが（晋陽の戦い）、趙襄子は智氏の軍に従って来た魏氏の当主・魏駒（魏桓子）と韓氏の当主・韓虎（韓康子）に寝返り工作を行った。韓魏両氏の軍は堰き止めていた水を智氏の軍営に向けて流し智伯軍を破り、智伯瑤を殺した。

これにより晋は事実上、趙・韓・魏の三氏によって分割統治されるようになり、戦国時代が始まる。

晋の滅亡後、趙はしばらくの間引き続き晋陽に都を置いた。

## 中国有数の大都市

秦始皇帝が中国を統一すると天下は三十六郡に分けられ、その内の太原郡の治所が晋陽に置かれた。

漢は全国を十三州に分け、その内の并州（中原の真北を管轄する）の州府が晋陽に置かれた。これが太原の略称「并」の由来となっている。

五胡十六国時代、華北にあり最大の勢力を誇った前秦が江南の東晋討伐の戦いを起こしたが逆に敗北し（淝水の戦い）、その後の混乱の最中に苻丕が晋陽で即位し、晋陽は長安も鄴も失った前秦の首都となったが、翌 386 年に西燕との戦いに出た苻丕は殺され前秦は隴西へと落ちのびた。

続く南北朝時代、東魏と北齊は晋陽を別都としている。

隋の時代には長安・洛陽に次ぐ黄河流域第三の都市になっており、唐の李淵はここで起兵し唐を興した。

この由緒から唐の時代に太原府は陪都として「北都」「北京」とされ、京師（西都）長安、東都洛陽に次ぐ都となり、これら三つの大都会が三都と称された。

五代十国時代には後唐が国を起す拠点、および別都となった。

当時この地域は鉄と石炭の両者を産出したため、以降、後晋・後漢・後周そして宋と続く五代政権の大陸統一を支える主要な経済基盤の一つとなった。五代十国時代後期、後周の崩壊後に一時期北漢が太原を首都として成立した。

「龍城」の別名はこの時代に由来しているが、979 年に宋の太宗の親征軍の前に英武帝・劉繼元は降伏し、徹底抗戦を続けた楊業（「楊家将」の第一代）も降伏する。

太宗は火攻めと水攻めで荒廃した太原を部下の大將・潘美に再建させた。

この時、城市の位置は汾河沿いの現在地へ西に数 km 移動している。

明および清代、山西商人（晋商）が政治との強い結びつきを得て台頭すると、太原府は華北のみならず中国の商業・金融・鉱業・工業の一大中心地となっている。

## 近現代の太原

清末期には太原にはキリスト教宣教師や多くのキリスト教徒が住んだが、1900 年の義和団の乱の際には義和団による虐殺が起こった（太原教案）。

特に当時山西巡撫だった毓賢は苛烈な排外主義者でもあり義和団を用いて教会や病院を焼き払うなどした。

1907 年に北京と武漢を結ぶ幹線鉄道（現在の京広線）上の石家荘からの支線が太原府に到達したが、一方で中国に近代的な銀行システムが導入されたことにより山西商人は大打撃を受け、従来の金融の中心地だった太原の経済は落ち込んだ。

中華民国時代には山西軍閥の閻錫山が太原を根拠地とし、豊富な資源を生かした工業化と教育などのシステム整備を進め経済を回復させた。

日中戦争では日本軍に占領され、支配地のほとんどを失った山西軍閥は弱体化し、その後の国共内戦では人民解放軍が閻錫山の軍を破り太原を占領した（中国山西省日本軍残留問題はこの時期に発生した）。

新中国建国後、太原は豊富な地下資源があることから重工業および石炭業で国家を支えた。経済開放後、老朽化した国営工場が多く海外への物流も不便だった太原は、臨海部に対して相対的に地位が低下した。

さらに地域で産出される石炭を燃料にした産業構造により、深刻な大気汚染などの公害にも悩んだが、環境の改善と産業の高度化、交通基盤の整備に力を入れている。

## 経済

太原市は山西省の中心として商業活動も盛ん。

1998年に山西華宇集団による本格的なデパート華宇購物中心（フアユーショッピングセンター）が開業。

2000年に外資系としてはケンタッキーフライドチキンが初めて繁華街である柳巷に開業。続いてマクドナルドなども市内に多数オープンしている。

華宇超市をはじめとして、寸草心超市、美特好などスーパーマーケットチェーンが市内に点在している。2005年にはウォルマートも開業した。

また古交市の屯蘭炭鉱などで産出される石炭をエネルギー源とした工業も活発である。

## 中国山西省日本軍残留問題

中国山西省日本軍残留問題（ちゅうごくさんせいしょうにほんぐんざんりゅうもんだい）とは、日中戦争終結後、中華民国山西省にあった日本軍と在留邦人が戦争終結の帰国命令に従うことなく現地にとどまり、そのうち約2600人は中国国民党軍の閻錫山（えんしゃくざん）が指揮する軍隊へ編入され、終戦後も4年間にわたり戦闘員として中国共産党軍と戦った問題である。2006年にこの問題を扱った映画『蟻の兵隊』が公開されたことにより、事件の存在がひろく知られるようになった。



## ★双塔寺（そうとうじ）

双塔寺 / ShuangTaSi / シュワンタースー



太原市東南の「郝庄村」南にある「双塔寺」は、明万曆36年（1608年）に建造された。別名「永祚寺」とも言い「祚」とは神に助けを求めるという意味である。

「前院」「後院」「塔院」の3つに分かれた寺内には、有名な「双塔」がある。明時代の高僧「仏灯」によって造られた、高さ約5

0m、レンガ式、13階建てのこの両塔は、60m間隔で並んでいる。

螺旋状の階段で11階まで登ることができ、頂上からは太原市全体を見渡すことができる。主殿「大雄宝殿」中央には、高さ4mの銅製「阿弥陀仏立像」、その両側には「釋迦仏」「薬王坐像」が並んでいる。

開花の時期になると、小院内には牡丹やライラック等が満開に咲き、中には明時代の「紫霞仙」と呼ばれる大変美しい牡丹もある。

碑廊には、有名な書道家「王羲之」「張旭」「顔真卿」「祁隽藻」等の書道が刻まれた石碑が260余残されており、字体も真、草、隶、篆等様々で、中国の書道芸術名所となっている。

## 双塔（そうとう）

双塔 / ShuangTa / シュワンター

太原の象徴である「双塔」は、太原東南「郝庄村」南に位置する。

原名は「文宣塔」、また聳え立つ様子は筆のようであるため、「文筆双塔」ともいわれている。

「双塔」は、明代万曆三十六年（1608年）、高僧「仏登」（妙峰祖師）によって、5年の歳月をかけて完成した。

真言密教の、円満が尽きないという意味を持つ「16」の数字をとって、2つの塔の距離は16丈（50m）となっている。

この「文峰塔」と「舍利塔」の2つの塔は、それぞれ特徴が異なっている。

直立形の「文峰塔」は、風水に利用されているのに対して、弧を描いた流線型の「舍利塔」は、礼拝の場所として「仏舍利子」「藏仏経」が祀られており、宗教色の強いのが特徴である。

## ★晋祠（しんし）

晋祠 / JinCi / ジンツー



太原市から西南 25 km の悬瓮山麓に位置する「晋祠」は、西周「武王」次男、晋建国の君主「姬虞」の祠として造られた。

歴代にわたり修復された現在は、「全国重点文物」として保存されている。

庭園式の観光地として名高い「晋祠」は、大きく中部・北部・南部の3部分に分かれている。

主な建築物が多くある中部には、「金人台」「对越坊」「鐘鼓楼」「献殿」「鱼沼飞梁」「圣母殿」等、起伏の激しい北部には、「文昌宫」「经东岳祠」「関帝庙」「吕祖閣」等、南部には「瀛胜楼」「经白鹤亭」「真趣亭」「水母楼」「公输子祠」等の建築物がある。その他最南端には、唐代開国大将「尉迟恭」の別荘と言われている「十方奉聖禅寺」や、北には高さ 30m、7階建て、八角形の「舍利生生塔」がある。

この塔は隋時代に造られ、その後宋、清時代にわたり修復が繰り返された。

手すりには瑠璃が施され、上からは「晋祠」全景が見渡せる。また祠内には「晋祠三絶」と呼ばれる「難老泉」「周柏」「侍女」の像もあり、国内外の「王氏」「張氏」祭祖の聖地にもなっている。

### 聖母殿（せいぼでん）

圣母殿 / ShengMuDian / ションムーディエン

「晋祠」の主殿「聖母殿」は、「魚沼飛梁」前方にある。

聖母とは「姬虞」の母「邑姜」を指しており、「聖母殿」はもともと「女郎祠」と言われていた。

宋時代に建てられたこの大殿は、まず7部屋、更に奥には6部屋があり、柱がないため、広々とした造りになっている。

廊柱に刻まれた木彫りの龍は、国内で現存する最古の木彫龍とされている。また「晋祠」でも珍しい43体の「侍女像」が祀られている。

### 周柏唐槐（しゅうはくとうかい）

周柏唐槐 / ZhouBaiTangKui / ジョウバイタンクイ

「周柏唐槐」は、「晋祠」の代表的な古木である。「聖母殿」北側にある「周柏」は、「斎年古柏」といわれ、元は2株であった。

2800年経った今も健在であり、不老長寿の象徴とされている。

「唐槐」は、「水鏡台」の前にあり、「晋祠」のエンジュの中で一番古いものだが、生き生きと茂っている。

## ★喬家大院 (きょうけだいいん)

乔家大院 / QiaoJiaDaYuan / チャオジャーダーユエン



太原市西南 64km、晋中地区「祁県」内にある「喬家大院」は、映画「紅夢」(大紅灯籠高高掛)の撮影地として有名である。

見渡す限りに並ぶ大きな赤い提灯と、建物の漆黒の色の調和が大変美しく、国内外から多くの観光客が訪れる場所である。清時代に建造され、元は山西省屈指の商業資本家の私邸であった。現在は民族博物館となっている。

50 余りの展示室には、晋中地区特有の、冠婚葬祭、商業、農耕にまつわるものや、民芸品等数多く展示されている。

楼上の扁額は、山西巡業僧から贈られたものの他、「李鴻章」、「傅山」直筆の物もある。大門向かいの扉には、それぞれ異なった字体 100 文字で、“寿”の字が彫られており、稀に見る芸術品とされている。

## 紅夢



『紅夢』(こうむ、原題:大紅灯籠高高掛)は 1991 年制作の中国映画。張芸謀(チャン・イーモウ)監督、鞏俐(コン・リー)主演。原作は 1990 年に書かれた蘇童(スー・トン)の小説『妻妾成群』。撮影は山西省祁県に実在する清朝時代の大邸宅・喬家大院で行われた。

この映画は第 44 回ヴェネチア国際映画祭で銀獅子賞を受賞、第 64 回アカデミー賞外国語映画賞にノミネートされた。

1920 年代の中国、19 歳の頌蓮(スンリェン)は父親が亡くなった後、実家が没落したため、陳佐千という富豪の第四夫人として嫁ぐことを余儀なくされた。彼の邸宅に嫁入りした際には王室の様な待遇で、気持ちの良い足マッサージを受けた。館の主人は、夜になり彼女の部屋に泊まる時門前に赤い提灯をかけた。しかし頌蓮はすぐに全ての妾たちが同様の贅沢な待遇を受けていることに気づいた。実際、主人は毎日どの妾の家で夜を過ごすかを決めると、その家の前に赤い提灯を灯した。その妾は足マッサージを受け、食事を決定することができ、下僕達の尊敬と服従を得ることができたのだ……。

## 地理

晋中市は山西省中部に位置し、陽泉市、太原市、呂梁市、臨汾市、長治市、河北省に接する。

市内は東高西低の地勢となっており、殆どが海拔 1,000m を越える丘陵地帯となっており、最も低い靈石県南西部の汾河沿岸でも海拔 547m となっている。

## 歴史

春秋時代には晋が晋中西部に祁県、鄆県（現在の介休県）、塗水県（榆次県）、馬首県（寿陽県）の 4 県を設置し、西部は白狄による肥国が存在していた。戦国期になると韓、趙、魏の三国が割拠していた。

秦が中国統一すると、前 221 年、晋中地区は太原県と上党県が設置され上党郡の管轄とされ、後漢には太原郡、上党郡、楽平郡の 3 郡が設置されている。南北朝時代には中国北部を統治した北魏により并州（太原、郷、楽平、上党郡）及び汾州（西河郡）が設置された。

隋代になると 598 年（開皇 3 年）に郡制廃止に伴い并州、介州、韓州、遼州、呂州の 5 州が設置されたが、まもなく郡制が再施行され、太原の西河両郡が、更に行政区画の整理が行われ太原郡、介休郡、霍山郡に改編された。

唐代になると頻繁な行政変更が加えられた後、883 年（中和 3 年）に太原府及び汾州、遼州が設置され、清末まで沿襲された。

明清時代には「晋商」と呼ばれる山西商人が中国全土で活動した。平遥県、祁県、太谷県は晋商が集い本拠を置く中国の金融の中心として栄えた。

当時は「金太谷、銀祁県、銅平遥」とも称され、その名残を残す建築や邸宅は各地に残る。特に平遥古城は街並みや城壁の保存状態が非常によく、世界遺産にも指定されている。

中華人民共和国が成立すると 1949 年に山西省の管轄となり、榆次専区が設置され、公署が榆次県に設置された。

1958 年には榆次専区は晋中専区と、1970 年には更に晋中地区と改称された。

1999 年 9 月 24 日、晋中地区及び県級市としての榆次市の廃止が決定され、新たに晋中市が設立された。

2000 年 10 月、晋中市人民政府が正式に成立し現在に至っている。

## 経済

晋中市は石炭、鉄、アルミニウム、硫黄などの地下資源に恵まれ、特に無煙石炭の品質は高く中国全土に供給されている。

これらの地下資源を活用した石炭や金属関連の工業以外に、産出される良質な土壌を利用した製陶業、農村での養蚕業から発展した紡績業を中心に軽工業も発達している。

また農業分野でも山西省で重要な地位を占めており、特に野菜と食肉出荷は全省一の生産量を誇っている。

## ★双林寺（そうりんじ）

双林寺 / ShuangLinSi / シュワンリンスー



平遥中心地から西南「橋頭村」北に位置する「双林寺」は、かつてこの地が中都という都市であったため、別名「中都寺」とも呼ばれている。

北魏初期に創建され、その後、修復が繰り返され、現存する殿堂の多くは、明、清時代のものである。また、この寺は、彩色の塑像が非常に有名であり、大きいものは3・4mから、小さいものは数cmまで、2,000体余り祀られており「東方塑像芸術の宝庫」と称えられている。

土壁で四方を囲まれた、約14000平方の敷地内には、十の殿堂、3つの院落、西には「廟院」、東には「経院」「禅院」「僧舎」がある。

主殿「釈迦殿」の壁一面には、「釈迦牟尼」成仏までの過程が描かれている。「羅漢殿」内の「羅漢像」18体は、それぞれ異なる姿と表情に富んでおり、逸品とされている。

## ★平遥古城壁（へいようこじょうへき）

平遥古城牆 / PingYaoGuChengQiang / ピンヤオグーチョンチャン



「平遥県」中心に位置する「平遥古城壁」は、西周宣王帝時代に造られ、その後明時代に増築され、現在のレンガ式の城壁となった。

山西省で現存する城壁の中でも、規模最大であり、国務院から歴史名城の一つとして保存されている。

全長約6160m、壁高約10mの城壁には3000の「垛口」、また60m間隔で、計72の「観敵楼」が建ち並んでいる。

この3000、72という数字は、「孔子」の3000人の弟子と、72人の賢人からきており、敵からの攻撃を防ぐのに大いに役立った。

また以前、城壁周辺には、「護城河」が流れており、戦争中この河は、町の人々を大いに助けたといわれている。東西には「瓮城」、東南には高さ24m、八角形の、瑠璃瓦で覆われた「奎星楼」がある。

## ★日昇昌票号（にっしょうしょうひょうごう）

日昇昌票号 / RiShengChangPiaoHao / リーションチャンピャオハオ



清時代中期、物品の流通と、貨幣の出回りによって、「票号」と呼ばれる金融機関が生まれた。山西人により業務が行われていた為、「山西票庄」とも呼ばれ、やがて全国を独占していった。

中でも「日昇昌」は最大規模で、「汇通天下」の名の下に、全国の都市へと支店を増やしていった。

平遥西大街路南にある「日昇昌」は、1,300 平方mの敷地内に、カウンター、客室、会計室、社員寮等様々な部屋があり、安全の為、壁は頑丈に作られ、上部の金網には警報機、道路に面した部分は、大門でしっかりと閉ざされている。

平遥古城の「票号」は、金融業発展史上、最重要の位置を占めており、その歴史、店舗の多さ、分布の広さ、資本力は国内外で有名である。

だが、1916 年以降、「銀行業」が出現し、その先進性に追いつかず、また、経済上依存の強かった、清朝政府の衰退と共に、早くも姿を消してしまった。

## ★古県衙（こけんが）

古县衙 / GuXianYa / グーシェンヤー



元代から清代までの平遥の政府所在地。

現存のものは 1370 年に建てられた。

多くの建築のうち中心となるものは、規模のもっとも大きな大堂で、知事が公務をこなしていた場所。

「古県衙」は、平遥古城西南部にあり、2万 6000 平方mの敷地内は3路に分かれている。中通りには、南から順に「衙門」「儀門」「牌坊」「大堂」「宅門」「二堂」「内宅」等が立ち並んでいる。

現在県衙の大堂等は修復中であり、見ることができるのは、「二堂」、「内宅」「耳房」等になっている。

## ★文廟大成殿（ぶんみょうだいせい でん）

文廟大成殿 / WenMiaoDaChengDian / ウェンミャオダーチョンディエン



平遥中心地東南端「雲路街」北側に位置する「文廟大成殿」は、国内で現存する最も古い「大成殿」の一つである。

現在、「山西省重要文物」として保護されている。

8000 平方mの敷地内には、主に「棧星門」「大成門」「大成殿」「明倫堂」「尊経閣」等の建築物があり、その中心となる「大成殿」は、金時代（1163 年）に建てられたものである。

五つの部屋がある殿内の四方は、石の欄干で囲まれており、天井両端は、瑠璃瓦で覆われている。中国には「文廟」が非常に多くあったが、早期に造られたものの多くは既に姿を消してしまった。

そのため、河北省の五代遺物としての「文廟大成殿」や山東省曲阜「孔廟」内の宋、金時代の「大成殿」は、大変貴重なものとして知られている。

## ★清虚観（せいきょかん）

清虚观 / QingXuGuan / チンシーグワン



古城内東大街路北にある「清虚観」は、原名「太平観」と呼ばれた、道教の宮観である。

唐時代に建造され、その後修復を繰り返し、現存しているものは、元・明時代のものである。

観内には「山門」「龍虎殿」「三清殿」「純陽宮」「玉皇殿」等の建築物があり、入り口の「牌楼」には、乾隆三十六年に記された「扁額」が掛けられている。

「龍虎殿」殿内には、高さ5mの威厳に満ちた「青龍」「白虎」神像、「三清殿」には、元時代のモンゴル文字で書かれた石碑が保存されている。

清時代に建てられた「純陽宮」の、宋・元・明・清時代の30余りの石碑は、道教の歴史と書道芸術を知る上で、貴重とされている。「玉皇閣」には、「窑洞」と呼ばれる、崖を掘り造られた、洞窟式の建築物が残されている。

その他、平遥地区、唐、宋時代の鉄製の仏像や、明時代の道教の木彫神像等、数多くの文物が保存されている。

## 地理

忻州市は山西省の北部に位置し、大同市、朔州市、陽泉市、太原市、呂梁市、河北省、陝西省、内モンゴル自治区に接する。

滹沱河が繁峙県に発し、南へ流れた後に市域を東へ横切り、五台山と恒山の間を通過して太行山脈を抜け華北平原へ流れる。

## 歴史

春秋時代は大部分が晋に属し、一部が白狄による肥国が位置していた。

戦国時代になり晋が韓、趙、魏に分裂すると趙の版図に組み込まれた。

秦による中国統一が達成すると太原、雁門、太平郡が設置され、唐代から宋代にうかけては忻州雁門郡、元代から清末までは忻州、代州、保徳州が設置された。民国初期は雁門道の管轄となっている。

2000年6月14日に地級市に昇格し忻州市が誕生した。

五台山の特色は、仏教寺院とラマ教寺院が共存するところだ。ラマ教信者が多い内モンゴルに近いという地理的条件のためか、仏教寺院の青廟ばかりではなく、ラマ教の黄廟も数多く残っている。

この仏教の一大聖地には、かつて入唐、入宋して修行した日本人の僧侶も多数訪れている。「入唐求法巡礼行記」を書いた最澄の弟子である慈覚大師円仁、興福寺の靈仙、京都南禅寺の宝叡などがこの地に滞在したという記録も残っている。

かつての日本人僧侶は仏の道を学ぶために中国に渡った。そして現代の中国の研究者は奈良、大和の古刹を中国唐代の仏教寺院と重ね合わせる。中国にはその時代の木造建築の寺院がほとんど現存していないためだ。

中国最古の木造建築である南禅寺は険しい山中にひっそりと建っていたため、戦災からの焼失を免れたと言われている。しかし日本と中国の最古の木造建築がともに仏教寺院であるということは、とても興味深い。これも仏のえにしなのかもしれない。

## ★南禅寺（なんぜんじ）



建中三年（781年）に建立された。殿内の梁の下に墨書されており、現存する木造建築では中国一古いと言われている。この寺院は1200年以上前に建立されたことになる。

## ★塔院寺（とういんじ）

塔院寺 / TaYuanSi / ターユェンスー



総面積1万5,600平方mの「塔院寺」敷地内には、「山門」「天王殿」「大雄宝殿」「大白塔」「藏経楼」等、多数の建築物があり、入り口は「万仏閣」付近の南正門と、「显通寺鐘楼」下の東門の2つがある。

以前「塔院寺」と隣の「显通寺」は一つの寺廟であったが、明朝万曆七～十年に改築が行

われ、それぞれが独立した。

寺院内にそびえたつ高さ50mの「大白塔」は、五台山の象徴とされており、頂上には200余の銅鈴が付けられている。

東側「小白塔」には「文殊菩薩」の金髪が残されているという言い伝えから、「文殊髪塔」とも呼ばれている。

北側「藏経閣」には、漢・蒙・蔵等の文字で書かれた経書が2万冊程保存されている。

またここ「塔院寺」にはかつて「毛沢東」「周恩来」が滞在したことがあり、「方丈院」には彼らが使用したベッド、腰掛、筆墨等の複製品が展示されている。

「塔院寺」東には、石洞上に建てられた城楼式の「青龍楼」、西には上から楊林街一帯が見下ろせる「山海楼」がある。

## 大白塔（だいはくとう）

### 大白塔 / DaBaiTa / ダーバイター

「大白塔」、別名「释迦文仏真身舍利宝塔」「大慈延寿宝塔」は、明時代万暦中に建造された、高さ56,4m、正方形、石灰式の白い塔である。

唐朝以前、ここには二階建て八角式の石塔があったが、その後再建が繰り返された後、現在の姿になった。

塔内上部には、高さ5mの「銅宝瓶」や252個の銅鈴が置かれ、下部には「释迦牟尼」「文殊」「普賢」「観音」「地藏王菩薩像」が祀られている。

須弥座の南方には3つの浅い石洞があり、左洞内には康熙年塔建造の記事碑、右洞内の石碑には、長さ50cm、幅20cmの、仏の足跡印が彫られている。塔を囲んでいる回廊には、ブリキが使用されている。

## 藏経楼（そうきょうろう）

### 藏経楼 / CangJingLou / ツァンジンロウ

「藏経楼」、別名「藏経閣」「大藏経閣」は「大白塔」後方にある。

2階建て、五部屋の殿内には「释迦牟尼仏」「阿弥陀仏」「薬師仏」「迦葉仏」等、9体の仏像が奉られており、中央上部には清朝「乾隆帝」によって書かれた木額が掛けられている。

高さ約30m、六角形、33層の木造棚「转輪藏」は、上にいく程大きくなる構造になっており、多数の経書が置かれている。

また底部の回転盤は手で動かせるようになっている。

現在「藏経楼」には漢・蒙・藏等の文字で書かれた2万冊余りもの経書が保存されており、中でも宋から清乾隆時代までの経巻が名高い。

五台山各寺廟にも、既に整理されているもので、《続藏経》、《頻伽藏経》、《磧砂藏経》、《藏経》《大正藏経》等、大量の経書や単行本が保管されており、その数は12部、330種類、3万9820冊にも及ぶ。

中にはチベット語や日本語で書かれた貴重なものもある。

## 文殊発塔（もんじゅはつとう）

### 文殊发塔 / WenShuFaTa / ウェンシューファーター

高さ7m「大白塔」の東側にある「文殊髪塔」は、別名「小白塔」とも呼ばれている。

言い伝えによると、北魏初期に、仏道を広めるため、物乞いをする貧しい女へと姿を変えた文殊菩薩が、遺品として残した金色の頭髪が祀られているという。

## ★顯通寺（けんつうじ）

显通寺 / XianTongSi / シェントンスー



五台山中心区、菩薩頂をふもとに位置する「顯通寺」は、漢明帝永平年（58～75年）に建造され、洛陽の「白馬寺」と共に、中国で最も古い寺廟である。現在は「全国重点文物」として保護されている。

「顯通寺」は、五台山寺廟の中でも規模最大であり、4万3700平方mの敷地内には、主

な殿堂として「観音殿」「大文殊殿」「大雄宝殿」「無量殿」「千鉢文殊殿」「銅殿」「藏経楼」等が挙げられる。仏事活動を行う場所である「大雄宝殿」殿内には「釈迦牟尼」「阿弥陀仏」「薬師仏」、軒のない珍しい造りの「無量殿」には「銅铸毗卢仏」が祀られている。「

銅殿」には「万仏」や、国内でも稀な銅製品の数々が残されている。

また、入り口手前の楼閣内には、銅時計「長鸣钟」が掛けられていて、表面には約一万字の仏経が彫られている。

文物に興味があれば、「藏経殿」内の珍しい書画や、「華嚴経字塔」をのぞいてみるのもよい。

### 観音殿（かんのんでん）

观音殿 / GuanYinDian / グワンインディエン

「観音殿」は別名「南殿」とも言い、「観音菩薩像」「文殊菩薩像」「普賢菩薩像」の三体が奉られていることから「三大主殿」と称されている。

殿内の両側にぎっしりと並べられた棚には、様々な種類の経書が置かれていることから「藏経殿」、また以前は、水陸における全ての者を救うとされる大法会、「水陸道場」もここに設立されていたため、「水陸殿」とも呼ばれている。

### 八角碑亭（はっかくひてい）

八角碑亭 / BaJiaoBeiTing / バージャオベイティン

「文殊殿」前にある「八角碑亭」内には、康熙四十六年に造られた、高さ約2.5m、幅約80cmの「漢白玉石碑」がある。

左側の石碑には、康熙帝直筆の文字が刻まれているが、右側の石碑には何もないため、「無字碑」と呼ばれている。

言い伝えによると、この2つの石碑の下には、もともと2つの池があったと言う。

ある日、天から「灵鷲峰」へ、目の無い一匹の龍が降りてきた。これを恐れ、いぶかしく思った康熙帝が、自らの権力を示すために、近くにあったこの2つの池をふさいで、石碑を作らせたのだった。

1つの池の石碑には、皇帝が住職に託した碑文が彫られたが、もう一つの池には災いを恐れ、誰も碑文を書こうとしなかったことから、右側は文字の無い石碑となってしまった。

### 大文殊殿（だいもんじゅでん）

大文殊殿 / DaWenShuDian / ダーウェンシューディエン

清乾隆十一年(1746年)に建造された、木造「大文殊殿」の殿内中央には「大智文殊」、その後ろには「甘露文殊」、前方には「獅子文殊」、「智慧文殊」、「孺者文殊」、「無垢文殊」、「聡明文殊」の五体が祀られている。

これらの文殊像の前には「護法韦驮像」、その両側には「十八羅漢像」がある。

### 大雄宝殿（だいうほうでん）

大雄宝殿 / DaXiongBaoDian / ダーションバオディエン

清光緒二十五年(1899年)に建造された木造「大雄宝殿」は、盛大な仏教行事を行う場所である。

殿内正面には、康熙帝直筆の横額が掛けられており、殿内には明、清時代の「釈迦牟尼仏」、「薬師仏」、「阿弥陀仏」が、両側には「十八羅漢」が祀られている。

広々とした仏前には仏灯がとり、線香がたかれ、色々な果物や鮮花が並べられている。

東側には「鼓」、「磬」、「銅鑼」、「木魚」等の仏楽器が置かれている。僧達は毎日の修行の他に、五台山仏教協会主催の大規模な仏教行事も行う。

### 無量殿（むりょうでん）

无量殿 / WuLiangDian / ウーリャンディエン

仏法が無限大にあることから、この名が付いた「無量殿」は、また、大梁、立柱、殿外、の縁先がないことから、別名「無梁殿」とも呼ばれ、手前には7部屋、更に奥には5部屋あり、内壁には青瓦が用いられ、外軒は枅組状に花卉の彫刻が施されている。

殿内中央には「銅鑄卢舍那仏」、その後ろには「弥勒仏」が奉られている。

唐時代の清凉国師（本命澄観）の4年にわたり綴られた「華嚴疏抄」にも殿内の様子が記されている。

梯子を登れば、全殿内を見下ろすことができる。

「無量殿」正面には、「普光明殿」、「法菩提場」、「逝多園林」等の横額をはめ込んだ閣洞があり、「釈迦牟尼」が7つの場所で、9つの「華嚴経」を説いたことから「七処九会殿」とも呼ばれている。

五台山各寺院、また中国国内でも特殊な構造である「無量殿」は芸術価値も高く、1956年に中国政府の特別支出金によって修復された。

## 千鉢文殊殿（せんはつもんじゅでん）

千鉢文殊殿 / QianBoWenShuDian / チェンボーウェンシューディエン

「千鉢文殊殿」はこの名の通り殿内に「千鉢文殊銅像」が奉ってある。明時代に造られたこの像の頭の上には、小さな頭が5つ乗っており、千本余の全ての手は鉢を持っている。更に、鉢の中には「釈迦牟尼仏」が座っていることから、「千臂千鉢千釈迦文殊像」とも呼ばれており、中国国内でも数少ない銅像である。

## 銅殿（どうでん）

銅殿 / TongDian / トンディエン

明朝万暦34年（1606年）に建造された「銅殿」「銅塔」は5万kgの銅が使われており、中国国内でも珍しい文物である。

真ん中が膨らんだ、太鼓形の四本の柱で支えられた殿内壁面には、「万仏」と呼ばれる仏像がぎっしりと铸造され、中央には1mの「銅仏」が奉られている。

また花や動物等様々な図案も施されている。

《清涼山志》の記載によると「銅殿」は五台山の高僧「妙峰」が全国13省で集めた布施によって建てられたという。「銅殿」前の両側には八角形、13階建ての「銅塔」がそびえ立っている。

もともと「銅塔」は5つあったが、そのうち3つは日本軍侵略時に消失したため、現在は2つとなっている。

また左側の塔には、親指大の小さな廟があり、中には「土地神像」が奉ってある。

## 藏経楼（そうきょうろう）

藏経楼 / CangJingLou / ツァンジンロウ

「藏経殿」俗称「後高殿」には、陶・木・金・石等、多くの珍しい文物や、書画芸術品が残されている。

五台山は一年中、風が強いため、僧達は風を鎮めるといわれている「鎮風印」を造ったという。

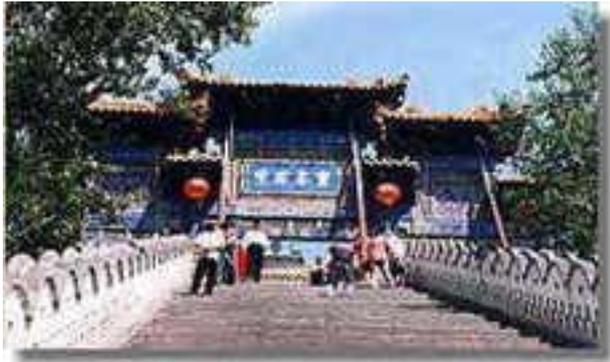
主な文物として、北魏太和年の「銅铸旃檀仏」、南北朝次代の石彫「観音菩薩」「侍理菩薩」、北宋开宝年に印刷された「雷峰塔藏経」、明時代の沈周「関雲長」、雲鵬「十八羅漢」等が挙げられる。

また高さ約6m、幅1.5m「華嚴経字塔」には、清時代康熙年、「許徳心」らが12年かけて書き上げたという、「華嚴経」80巻、計60万の字が書かれている。

もともとは、塔内の仏像の眉から、風鈴の縄、蓮画の莖にまで、小さな字が施されていた。

## ★菩薩頂（ぼさつちょう）

菩薩頂 / PoSaDing / ポーサーディン



五台山のラマ教寺院の中で、最大規模を誇るのが「菩薩頂」である。

「菩薩頂」とは、満州族の言葉で「文殊菩薩の住居」という意味である。

毎年、旧暦6月になると、黄教法会の主催地として、ラマ教徒達の「鎮魔」が盛大に行われる。

記載によると、北魏孝文帝時代に建てられた当初は「大文殊院」という名であったが、その後修復、改名を繰り返し、清時代にラマ教崇拜の場所として、青廟（和尚廟）から黄廟（ラマ廟）へと変わった。

「菩薩頂」には、文物が数多く保存されているが、中でも珍しいのが、後院にある4つの大きな銅鍋である。

毎年恒例の「六月大会」になると、ラマ教徒たちはこの銅鍋で食事を作り、「跳神鎮魔」として供える。

また旧暦12月「八仏成道日」には、黄米・緑豆・蓮の実・栗・サンザシ等を入れて八宝粥を作る。

寺内には「天王殿」「释迦牟尼殿」「菩薩殿」があり、この地を訪れた歴代の皇帝が書いた石碑や額が残されている。

中には「康熙帝」が、四碑面にそれぞれ漢・蒙・満・藏の4文字で書いた「漢白玉四棱柱碑」もある。

## ★殊像寺（じゅそうじ）



文殊像が祀られているため文殊住処・殊像寺と謂われています。唐の時代の創建です。元代に修建されましたが火災で焼失し、明代成化23年(1487年)に再建されました。

## 地理

大同市は山西省の最北端、黄土高原の東北部に位置している。

桑乾河やその支流・御河が東の張家口市方面へ流れる。

北部は長城により内モンゴル自治区ウランチャブ市の豊鎮市・涼城県に接し、西南は朔州市及び忻州市と隣接している。

## 歴史

戦国時代には趙の版図であった大同は雲中、雁門、代郡が設置されていた。

秦による中国統一後は雁門郡の管轄とされ、漢代に郡県制が施行され平城県がこの地に設置された。

モンゴルに近い大同は農耕経済と遊牧経済の設定に位置する地勢的条件により両文明の影響を強く受けている。

前漢の建国者の劉邦は大同付近の白登山で匈奴冒頓単于との間で戦火を交え敗北している（白登山の戦い）。

また鮮卑が建国した北魏は、398年から494年にかけて大同に都を定め、付近には石窟寺院である雲崗洞窟を残している。

730年（開元18年）、唐は雲中県と改称している。

五代十国時代、北方で勢力を伸ばした遼の援助により後晋を建国した石敬瑭は、援助の代償として燕雲十六州を遼に割譲、遼は1044年（重熙13年）に副都の一つとして西京大同府を設置、1048年（重熙17年）に大同県が設置され、行政区画の変遷が行われたが「大同」の名称が現在まで使用されることとなった。

明代になると北元に対抗すべく万里の長城を修築するなど、防衛政策を強化する必要に迫られた。

大同は長城付近への物資輸送における中継地点として重要な役割を果たした。

中華民国が成立すると大同県は東西二県に分割されるが、1949年5月に共産軍が“解放”すると二県を合併し大同市を成立、察哈爾省の管轄とした。

1953年に山西省の管轄に変更され、1993年には雁北行署が廃止され大同市に編入され現在の行政区域が成立している。

## ★恒山（こうざん）

恒山 / HengShan / ホンシャン

海拔 2017m、渾源県中心地から南へ 10km、大同市から 62km に位置する「恒山」は東岳「泰山」、西岳「华山」、南岳「衡山」、中岳「嵩山」と共に「五岳」として知られている。

主な見どころとして「果老嶺」「飛石窟」「大字湾」「虎風口」等が挙げられる。

東西 150km に広がる「恒山」には、多数の道教廟が分布している。

中でも主峰「天峰嶺」前方の一番大きな「北岳廟」は、明時代に建てられ、「恒山」全景図、「北岳真君像」、祭山の様子が歴代に渡り記載された石碑等、「恒山」の歴史を知る上で貴重な資料となっている。

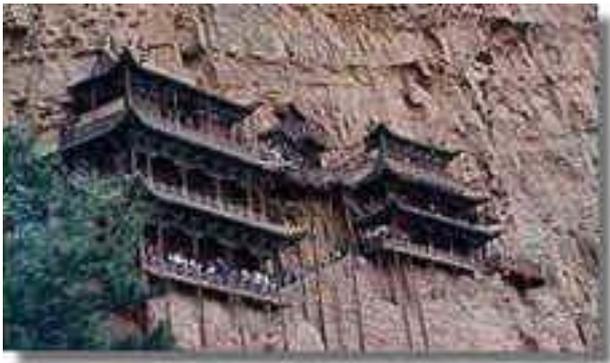
「恒山」ふもとの「曇空寺」、应県佛宮寺「释迦木塔」、渾源城内「円覚寺覚砖塔」「永安寺」は中国古建築の重要な位置を占めている。

また「恒山風景区」は 1982 年、国務院によって「国家重点景勝地」とされた。

「風景区」の平均温度は 6.1℃、1 月は -12℃ と寒いが、7 月は 21℃ 前後と、理想的な避暑地になっている。

## ★懸空寺（けんくうじ）

懸空寺 / XuanKongSi / シュエンコンスー



大同市から約 80km の、「恒山」のふもとの「金龍峽」に位置する「懸空寺」は、切り立った崖の上に一風変わった方法で建造されている。

岩に穴をあけ、その中に材木を挿して組み立ててあり、下は断崖絶壁である。

もともと、ここは、大同の交通路として使わ

れていたが、河水の氾濫が多いため、何百メートルも上の崖の上に建てられた。

そのため、南の五台山と、北の大同を往来する信徒達の参拝に大いに役立ったという。

「懸空寺」は北魏時代の「了然和尚」が建てたとされている。過去何度か修復されているが、元の構造は変えられていない。

「三宮殿」、「三聖殿」、「三教殿」には銅、鉄、泥、石で造られた像が約 80 体祀られている。

その他 40 ヶ所余の殿堂は複雑に入り組み、それぞれ栈道と梯子でつながれている。

この栈道は「鉄扁担」と呼ばれ、当地の特産である鉄杉を加工したものである。寺内の石壁には、「懸空寺」の建造技術を称賛する言葉が刻まれている。

また、近くには貯水量 1300 立方メートルの「恒山」ダムがあり、灌漑に利用されている。

## ★九龍壁（きゅうりゅうへき）

九龍壁 / JiuLongBi / ジウロンビー



大同市内の数多くある「龍壁」の中で一番大きいのが、大同市東部にある「九龍壁」である。

もともとは明初代王「朱桂」府邸の目隠し用の塀であった。

全長約 46m、高さ 8m、厚さ 2m のこの壁は 5 色の瑠璃で構成されている。

底部の須弥台には、麒麟、獅子、虎、鹿等様々な動物、中部には 9 頭の龍がより立体的に見えるように、高い位置で彫り上げられている。

その上には 62 の瑠璃が枅組状に組み、壁頂は 5 層に軒が連なり、細かい花模様や遊龍が施されている。

また壁上部は青緑色で渦巻く波が、下部には青色で霧、黄色で流れる雲が表現されている。

壁の前方には、石柱で囲まれ、橋の架かった長さ約 35m、幅 4,3m、深さ 0,8m の珍しい「倒影池」がある。

言い伝えによると、かつて落雷の衝撃でできた泉に、龍が舞う姿を見た王が造らせたのだという。

## ★雲崗石窟



中国山西省北部の都市・大同（だいどう）は、北京から西へ350 kmのところに位置している。

北魏(386 - 534)の最初の国都・平城はこの地に置かれた。洛陽の竜門石窟、敦煌の莫高窟と並んで中国三大石窟の一つに数えられる雲崗石窟は、華北最大の石窟寺院であり、大同の西約16 kmにある武周山の麓に築かれている。

開鑿（かいさく）は北魏の和平元年（460）に始まり、太和18年（494）の洛陽遷都を経て、正光5年（524）まで約64年をかけて行われたという。

但し、その後も造営は継続され、隋・唐時代や遼・金時代の仏像も見ることができる。

北魏時代の仏教興隆の功労者は第4代・文成帝（在位452～465）とされている。

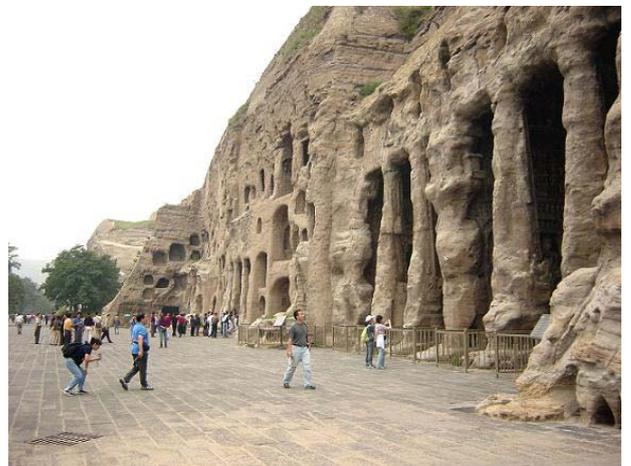
452年、第3代・太武帝が宦官に殺され、彼が実施してきた廃仏が終了した。

崇仏者だった文成帝が皇帝に即位すると、仏教復興に力を尽くした。

彼の治世の時代には、国家と仏教の結びつきが強くなっていった。

文成帝は仏教復興の詔を下し、仏教教団を統率する中央官庁である沙門統の長官に曇曜（どんよう）を任命した。

和平元年(460)、曇曜は北魏の都・平城の西にある武周



（雲崗石窟が開鑿された武州塞）

山に石窟を築くことを建議した。

文成帝は曇曜の建議を受け入れると、彼を責任者として五窟を開くことを許可した。

第2代・明元帝の時から武周山は歴代の北魏皇帝から福を祈る山とされてきた。一方、当時の平壤は中国北方の政治・宗教・文化の中心であり、全国から優秀な人材が集められていた。

その中には、涼州から移住を強制された僧侶3千人、官吏・人民・工匠3万人がいた。北魏の皇室はその国力をもとに、大規模な雲崗石窟の開鑿を始めた。

雲崗石窟を世に知らしめた日本人の功績は大きい。

最初にこの石窟を世界に紹介したのは東京帝国大学の伊東忠太教授（1954年没）で、東亜古建築の研究のため、明治35年から36年にかけて中国各地を歴遊し、その旅行中に雲崗石窟を発見し、近代的学術的手法で調査し、世界に広めた。

その後、関野貞（1935年没）が石窟を調査し、共著『支那仏教史蹟』の中で雲崗石窟を紹介している。

京都の東方文化研究所の若い所員、水野清一と長廣敏雄の両氏は昭和13年(1938)から組織的な調査を開始し、昭和19年(1944)まで7回の調査を行った。

その報告書は戦後『雲崗石窟』全16巻として出版された。

## 雲崗石窟寺院の配置



## 一 雲崗石窟の区分と開鑿時期

武州川の北岸は砂岩質台地の断崖が続いている。

その断崖に東西約1 kmにわたって開鑿（かいさく）された雲崗石窟は、いずれも仏教の石窟で、開鑿は紀元453年に始まり、今日まですでに1500年の歴史がある。

中国の調査では、現存する主要な石窟は45あり、それに付属する大小の窟龕（くつがん）は252にのぼる。

これらの石窟には、10m以上の大仏像が9体、1～10mまでのものが911体、1m以下のものが4万8170体、その他の彫像が2080体、合計すると5万1170体の仏像が彫られているという。

そのほとんどは、北魏の第4代・文成帝の和平年間(460 - 465)から第6代・孝文帝の太和17年(493)までに開鑿された。

石窟の総面積は約40万㎡である。

1961年に、雲崗石窟は中国国務院から国の初めての重点文化財と指定された。

2001年にはユネスコの世界遺産にも指定された。

山の地形によって、石窟全体は東部・中部・西部の3つに分けられ、東から西に番号が付けられている。

東方の丘には第1窟から第4窟、中央の丘には第5窟から第13窟、西方の丘には第14窟から第45窟がある。

西方の丘は、さらに東側半分と西側半分に区分され、東側半分に位置する第16窟から第20窟は、和平元年(460)に沙門統の曇曜が提出した建議によって皇室が造営したもので、曇曜五窟と呼ばれている。

これらの石窟は第一期の造営に属し、和平年間（460 - 465）に開鑿された。

第一期に開鑿された曇曜五窟（第16 - 20窟）は、床面が楕円形をしていて、天井は穹窿状になっているのが特徴である。

主要な造像は三世仏と千仏で、三世仏は石窟内の大部分を占め、千仏は外壁に彫られている。

曇曜五窟のもう一つの特徴は、窟内いっばいに16.8m、15.5m、13.7mといった巨大な仏像を彫りだしている点にある。

五窟を企画した曇曜は、敦煌莫高窟の第275窟などのように、主尊が窟内いっばいに安置して、見る者を圧倒するような故郷涼周の石窟を頭に描いていたものと思われる。

その背景には、4世紀から5世紀にかけてガンダーラ地方で巨大化した粗像製作の影響が指摘されている。

第二期の石窟は、文成帝の死後から孝文帝が落陽遷都する太和18年(494)までの30年にわたって造営されたもので、床面が方形になっているものが多い。

上下左右は層または段に分かれていて、龕像（がんそう）が多くなる。

第一期のような巨大な仏像は少なくなるが、題材が多様化してくる。内部は前後二室に分かれ、方柱塔がある。

第2期に属する主な石窟は5組ある。そのうち4組な双窟（第7・8窟、第9・10窟、第5・6窟、第1・2窟）で、あと一組は3窟から構成されている。

第三期の石窟は、孝文帝が洛陽に都を遷した太和18年(494)以後、北魏滅亡(535)にいたる時代に造営されたもので、主な石窟は第20窟から西に位置している。

小窟龕が多く、塔窟もあり、壁に三龕や二龕を設けた石窟が多い。

## 一 曇曜五窟

北魏の文成帝の和平初年（西暦460年）から5年間、高僧・曇曜の指揮によって開鑿されたとされる曇曜五窟は、西方の第16窟から第20窟の5窟がこれに相当する。

曇曜五窟は、北魏仏教が世俗の王権に依存していた特徴をよく表していると言われる。本尊はいずれも巨大であり、それぞれの石窟において主要な位置を占めている。

五窟の大仏はそれぞれ北魏建国の五人の皇帝を象徴しているという。礼仏とは皇帝を拝することと同義だった時代の証である。

仏教とは、仏像などの芸術作品を媒体として教義を教える宗教である、と言われる。したがって、仏像は信者に教義を伝え、難解な教典を理解しやすく人々に受け入れやすいものに変える手段であると言えよう。

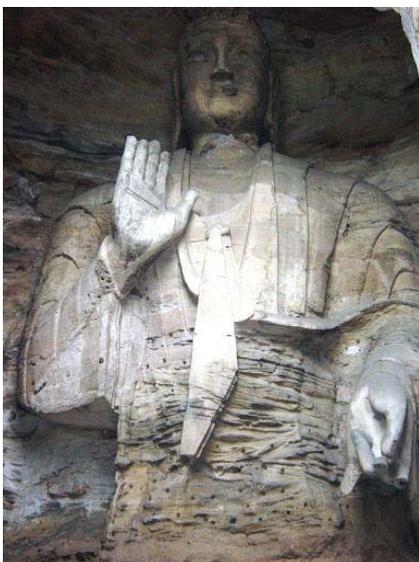
だが、曇曜五はもう一つ際だった特徴を持つ。当時在位していた文成帝を象徴した第16窟の本尊が単独の釈迦仏立像である以外は、いずれの石窟でも如来形の三世仏（過去仏、現在仏、未来仏）を本尊としている点である。

そのねらいは明らかだ。皇帝のために、そして皇室の繁栄のために、三世仏が造られたと考えるよいであろう。

これらの仏像は、中国式の「僧祇支（そうぎし）」という下着をつけ、腰に裙（くん）をまき、「大衣（だいえ）」で全体をおおう服装をしている。

こうした雲崗初期の仏像は、敦煌の莫高窟（ばくこうくつ）に彫られた北魏窟の仏像の表現に近い、とされている。

### 第16窟—文成帝



第16窟の本尊・釈迦仏立像

曇曜五窟の第16窟の本尊である釈迦立像は、第4代・文成帝を象（かたど）ったと言わ

れている。

曇曜の献策を受けて、ここ武周山に石窟寺院の建立を決意したのは、他ならぬ文成帝自身であり、彼は465年まで在位している。

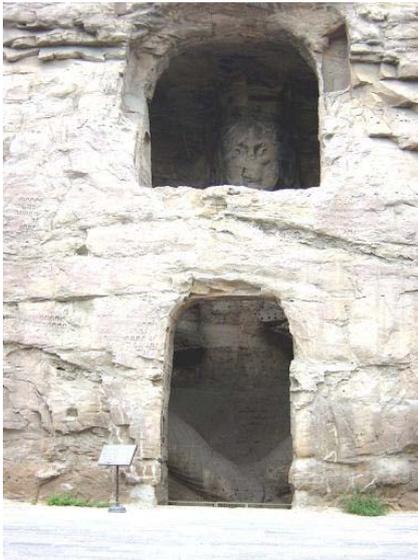
高さ13.5mの巨像は髪が波状に表され、美しい顔立ちをしているが、おそらく生前の文成帝を模したものと考えて間違いない。

この巨大な石仏は、僧祇支をつけ、裙を巻き、大衣で全体をおおっている。

胸の前で結んだ帯が下に長く垂れ、衣の文が階段式に平行に表されている。

像に下半分は破壊されているが、像の前に立って仰ぎ見ると、仏像を仰ぐというより、皇帝の前にひれ伏す感じである。

### 第17窟—景穆帝



第17窟の主尊・交脚弥勒

北側の壁に高さ15.6mの交脚弥勒菩薩像が掘られている。

この菩薩像は、太武帝の長男で太子だった晃（景穆（けいぼく）帝）を象ったとされている。

太武帝の破仏によって北魏仏教は大打撃を受けたが、太子晃は陰で仏教を助け、そのお陰で仏教教団は命脈を保つことができたと言われている。

晃は451年に病死し、その翌年に太武帝が殺されたので、晃の長男だった文成帝が即位して、亡父の遺志を継いで仏教の興隆に努めた。

東の壁には仏陀座像が、西の壁には仏陀立像が掘られている。

交脚弥勒菩薩像とあわせて三世仏という。

西壁の仏龕には、円形の頭光をつけた供養天が掘られている。

大髻（たいけい）を結び、顔はふくよかで眉と目が細長い。

第17窟には太和13年(489)の銘がある仏龕（ぶつがん）があり、曇曜五窟の中では最も遅れてできたものと考えられている。

## 第18窟—太武帝



第18窟正壁の千仏袈裟の仏

第18窟は、第19窟とともに最も早く完成したとされている。

高さ15.5mの主仏は優しく厳かな表情をしていて、太武帝を象ったと言われている。右肩を出して袈裟を羽織り、右手を下に垂らして、左手を胸の前に置いている。袈裟には小さな仏像が多数掘り込まれており、「千仏袈裟」と呼ばれている。

本尊と東西の壁の立像仏との間に、十大弟子像と脇侍菩薩像が彫られている。

東側の4体の弟子像の頭が丸彫りされていて、体は高浮彫されていて、あたかも壁から抜け出たような印象を与える。

## 第19窟—明元帝



明元帝を象った巨大な大仏

第19窟北壁の本尊・釈迦立像は第2代・明元帝を象ったとされている。

雲崗石窟寺院の中で2番目に大きい大仏で、16.8mもある。

耳が異様なほど長く垂れ下がっていて、首に達している。通肩で大衣をまとひ素足で立っている。

右手は胸の前で掌を外側に向けて施無畏（せむい）印を結び、左手は合掌して跪いている子供の頭を撫でている。釈迦が6年の修行の後に成道して我が子と対面したとき

の様子を表しているとのことだ。

だが、顎の部分が欠けたこの巨大な仏像を下から見上げると、昔のテレビ漫画の「鉄人28号」を見ているような錯覚を覚える。  
体中に刻まれている小さな穴はまるで鉄板を鋸止めした鎧のようだ。

## 第20窟—道武帝



(雲崗石窟を代表する第20窟の露坐の大仏)

第20窟の北壁に結跏趺坐する本尊は、北魏の開祖・道武帝を象ったとされる三世仏である。

その高さは13.8m。この石窟の前の壁が遼の時代以前に崩壊したため、本尊が野外に出ている。

このため、俗に「露坐の大仏」と呼ばれている。

観光パンフレットなどに必ず取り上げられる仏像なので、なじみが深い。顔は丸みを帯び、両耳は肩に垂れ、両目は鋭く輝いて前方を見据えている。

高く通った鼻筋、鋭くくっきりした唇、まっすぐに張った両肩、厚い胸。どこをとっても開祖・道武帝のたくましさを感じさせる。

本尊の左に菩薩の立像がある。その衣文がなだらかで、体軀の表現も力強い。

## -- その他の石窟

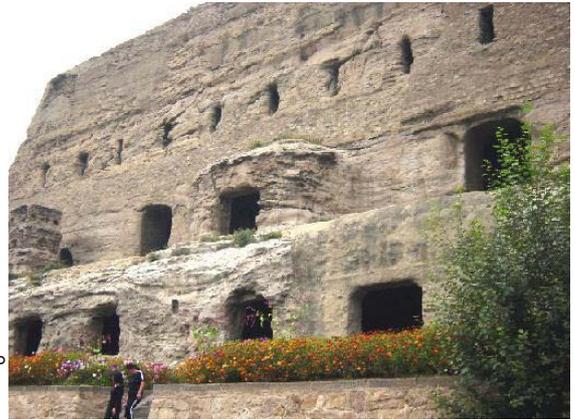
### 第3窟

第3窟は雲崗最大の石窟で、窟内の高さが25mもある。

当初は大型の塔廟窟として設計され、北魏時代に開鑿（かいさく）が始められた。

しかし都が洛陽に遷されるまでに彫られたのは、方柱の南面と東・西面の一部だけだった。

唐代になって北壁西側の倚坐像と左右の脇侍菩薩が彫られた。



石窟前面の上部には12の方形の掘り込みがある。これは窟全体を蓋う巨大な木造建築があったことの名残だそうだ。

実際に石窟の中に入ってみると、掘削が途中で放り出された洞窟といった感じだ。

内部は前後2室が彫られていて、後室にある、豊満な滑らかな西方三聖（阿弥陀仏・観世音菩薩・大勢至菩薩）は、唐代に彫られたものである。

しかし、石窟の完成はあきらめたようである。

### 第5・6窟

第5窟とその右隣にある第6窟は、孝文帝の勅願で太和7年(483)ごろに完成したとされる双窟である。

石窟の前に木造の楼閣が建てられていて、一見しただけで仏教寺院と分かる。

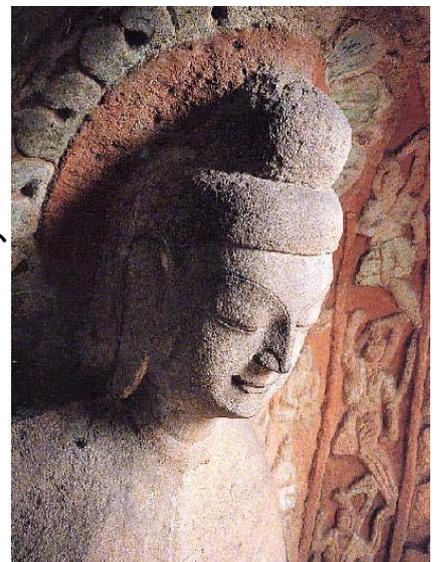
屋根を瑠璃瓦で葺いた楼閣は、柱間5間の4層建築で、清の順治8年(1651)に再建された。

第5窟も第6窟も、内部の諸仏は清時代に彩色し直したのか、とてもカラフルである。

第5窟の中央には、黄金色に塗られた釈迦牟尼坐像が彫られている。

高さが17mあり、雲崗石窟中最大の仏像である。

第6窟の中央には高さ15mの塔があり、各層には仏像、菩薩像、羅漢像、飛天像などが、また天井には33天神像が刻まれている。



第6窟の仏像の服装は、それまでのインド式の薄い着物を両肩または左肩にかけるものと

は異なっていて、漢族の服装になっている。  
すなわち、中国式の上衣を着て下裳を付けている。

第5窟の前室北壁の小仏龕の中に、実に顔のきれいな観音像が彫り込まれていた。  
周りの仏像が彩色されているのに、この仏像だけが色落ちしている。  
入り口の誰にでも手に触れる位置に刻まれているためか、この典雅で優美な姿に参拝者が  
さわるのだろう。  
広隆寺の宝冠弥勒菩薩のイメージによく似ていた。



第6窟にも様々な仏像が仏龕に彫られているが、その南壁の中程に飛鳥大  
仏に似た座像があった。  
もちろん顔つきなど似て非なるものだが、造形感覚に共通するものを感じ  
た。  
もし止利仏師がこの仏像を見ていたならば、必ず模写したのではと、よけ  
いなことを考えた。

## 第7・8窟

曇曜五窟に続いて開鑿されたと思われるのが、第7・第8窟で  
ある。

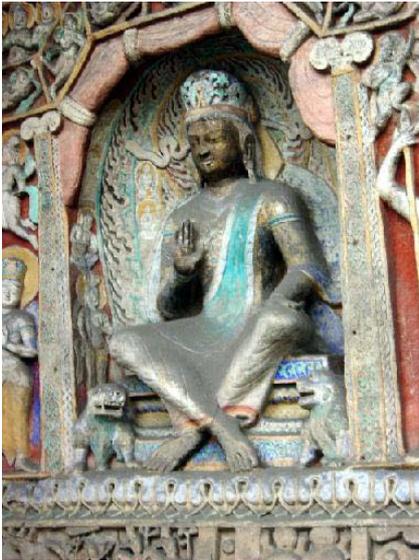
なにしろ雲崗石窟は紀年銘があるものがきわめて少ない。この  
ため、和平年間以降、太和初年(477)ごろまでに造営されたと  
推測されている。第7窟と第8窟は一对窟(双窟)で、前室と  
主室(後室)からなる。も  
っとも図像学的内容と、整頓された彫刻意匠を持っていると  
される。

第7窟の主室南壁の拱門上部には6体の供養天が、2組に分か  
れ互いに向かい合って跪いている。  
そのうちの一体は顔が丸くふくよかで、目と眉が細長く、鼻梁  
が高く、口は小さく薄い。遠目にも優美な姿に見える。



(第7窟の供養天)

## 第9・10窟



第9・10窟は第7・第8窟の西隣にあり、これらの石窟に引き続いて開鑿されたと考えられている。

第7・第8窟と同様に、一対窟（双窟）で、前室と主室（後室）からなる。

第9・10窟の仏像は、インド・グプタ様式を反映している。

第9窟前室北壁西側には、ふくよかで端正な顔立ちをした交脚弥勒菩薩像が彫られている。

後世、金が貼られ、さらに彩色の補修が施されている。

（第9窟前室北壁西側の交脚弥勒菩薩像）

## -- 曇曜(どんよう)について

(曇曜五窟)

雲崗石窟は曇曜の建議によって、和平元年(460)に開鑿が始まったとされている。

曇曜は、文成帝の治世(440年~465年)に沙門統(仏教長官)に任じられ、それまでは道教重視、仏教弾圧の方針から転換した国家仏教の整備に大いに貢献した。

彼は、武周山に石窟5カ所を開き、先代の5人の皇帝(道武帝、明元帝、太武帝、太子晃(景穆、即位前に崩御)、文成帝)の供養にすることを文成帝に奏上したという。

そして開鑿された曇曜五窟が、雲崗石窟の始まりであるとされている。



曇曜は幼くして出家し、北涼(420-439)の太傅・張潭に師事した。

中国の北部を統一した北魏の太武(たいぶ)帝は、太延5年(439)、北涼を攻めてこれを滅ぼし、その都・涼州の民3万余家を、北魏の都・平城(山西省大同)に移した。

その中に、曇曜などの僧侶や多くの技術者がいた。

太武帝による北涼平定をもって、304年に匈奴の劉淵(りゅうえん)が漢王を称して始まった16国の大乱は終わり、黄河流域に沿う華北地域はほぼ統一された。

太武帝のとき寇謙之(こうけんし、362-448)があらわれ、道教が国家的宗教になった。

太武帝は太平真君7年(446)、廃仏令を出して仏教を弾圧した。

中国における仏教迫害は「三武一宗の法難」と言われ、四回を数える。

太武帝の仏教弾圧はその最初のものである。

この時期、曇曜は還俗して中山に隠遁していた。

承平元年(452)、太武帝が宦官によって殺され、文成帝が13歳で即位した。

この若き文成帝は仏教復興に心をくだき、和平元年(460)、曇曜を召し出し、当時の仏教界の最高位である(第2代)沙門統に任じた。

曇曜は文成帝に要請して大同の西に雲崗石窟を開きはじめ、この事業を孝文帝まで続けている。

彼は文成帝から孝文帝まで三代に仕え、寺院を建立し、多くの仏像を造り、訳經典にも携わっている。